

日本の近代音楽の基礎を作った

しも おさ かん いち
下 總 皖 一



—座右の銘—

高く飛ぶ鳥は

地に伏すこと

長し

作曲家・音楽理論家・音楽教育家として
生涯を音楽に捧げた偉人



下總皖一年譜

- 明治31年(1898年) ● 3月31日、埼玉県原道村大字砂原75(現・加須市)に父吉之丞、母ふさの二男として生まれる。
- 明治45年(1912年) 14歳 ● 3月、栗橋尋常高等小学校を卒業
● 4月、埼玉県師範学校に入学
- 大正6年(1917年) 19歳 ● 3月、埼玉師範学校本科一部を卒業(現・埼玉大学)
● 4月、東京音楽学校師範科に入学(現・東京藝術大学)
- 大正9年(1920年) 22歳 ● 3月、東京音楽学校を首席で卒業。記念奨学賞を受ける
● 4月、長岡女子師範学校に赴任。
- 大正10年(1921年) 23歳 ● 1月、飯尾千代子と結婚。
● 9月、秋田県立秋田高等女学校へ転任。秋田県師範学校附属小学校でも教鞭をとる。この地で新居を構えた。
- 大正13年(1924年) 26歳 ● 9月、栃木師範学校に転任。千代子夫人が病気がちのため伸枝と改名。下總も覚三改め、皖一を名乗る。本格的に作曲に取り組む。
- 昭和2年(1927年) 29歳 ● 4月、上京。居住を牛込喜久井町に移す。

- 昭和7年(1932年) 34歳 ● 3月21日、文部省在外研究員として、作曲法研究のため渡独。ベルリンの国立ホッホシューレに入学。パウル・ヒンデミット教授に師事。
- 昭和9年(1934年) 36歳 ● 9月3日、滞独2年の留学生生活を終えて神戸港に帰着。東京音楽学校教師となる。12月、教授となる。
- 昭和10年(1935年) 37歳 ● 曲・三味線協奏曲、著・和声学
- 昭和13年(1938年) 40歳 ● 曲・箏独奏のためのソナタ、著・作曲法
- 昭和15年(1940年) 42歳 ● 文部省教科書編集委員となる。
- 昭和16年(1941年) 43歳 ● 9月、品川区上大崎に転居
- 昭和17年(1942年) 44歳 ● 3月、東京音楽学校教授となる。
- 昭和19年(1944年) 46歳 ● 著・日本音階の話
- 昭和25年(1950年) 52歳 ● 下總皖一混声合唱曲集10巻の出版始まる。
- 昭和30年(1955年) 57歳 ● 11月、文部省教科調査委員となる。
- 昭和31年(1956年) 58歳 ● 10月、東京芸術大学音楽学部長となる。
- 昭和33年(1958年) 60歳 ● 1月、東京国立文化財研究所芸能部長となる。11月、文部省視学委員となる。
- 昭和34年(1959年) 61歳 ● 6月1日、東京芸術大学音楽学部長を辞任。教授として逝去まで同大学に在籍
- 昭和37年(1962年) 64歳 ● 7月8日、永眠

下總皖一誕生

下總皖一は、明治31年3月31日、現在の加須市（旧大利根町）に、父吉之丞、母ふさの二男として生まれました。

本名を覚三といい、幼いころは豊かな自然の恵みと、父親の文学好きの血筋を受け継いで、多感な少年時代を田園地帯で過ごしました。

また、父親が校長先生だった尋常高等小学校に入学しました。この時、学校にあったベビーオルガンを弾き大変喜びました。

これが皖一と音楽との出会いです。



努力家の下總皖一

東京音楽学校に入学した下總皖一は、あまり目立たない学生でしたが、じっくり丁寧にねばり強く勉強を続け、首席で卒業しました。同時に記念奨学賞も受賞しました。

昭和7年、文部省在外研究員としてドイツに渡り、ドイツの優秀な人でも入学が困難な国立高等音楽学校ホッホシューレに入学し、世界的に有名なパウル・ヒンデミット教授に師事しました。

ドイツでは新しい作曲の知識をどんどん吸収する一方、「日本人の自分にしか表現できない作曲」をしたいとの思いを徐々に強くしました。



音楽理論家・音楽教育家
としての下總皖一

昭和9年(1934年)ドイツ留学から帰って、翌10年に著した理論書「和声学」は、ドイツでの恩師パウル・ヒンデミットから激賞されました。その後次々と理論書を著し、「作曲法」「日本音階の話」「作曲法入門」「楽典」「音楽理論」「対位法」など日本の近代音楽の基礎を作ったとされています。

「和声学の神様」とまで言われました。

また、昭和31年(1956年)には、東京芸術大学の学部長になり、日本の音楽教育の頂点に立ちました。



多くの校歌を作曲

下總皖一が作曲した校歌は全国の40都道府県で歌われ今も引き継がれています。なお、下總皖一が作曲した校歌は500曲以上とされています。

なお、埼玉県で作曲した校歌は出身校の原道小学校(旧原道尋常小学校)や埼玉大学教育学部附属小学校など90曲にも上ります。

※別のパネルに下總皖一埼玉県校歌マップがあります。



愛用したピアノ

みかん好きで有名

旅行の時は「作曲ノート」と「みかん」を決して忘れなかったそうです。

時には、みかんを20個も持っていき、みんなにすすめ自分でもとてもおいしそうに食べました。

芸大の学生がみかん狩りの旅行を企画した時は、喜んで参加したそうです。

ガッチャン！

とても几帳面な生活ぶりでした。時間には厳しく、遅刻は許さなかったそうです。

芸大の教授時代に学生たちから「ガッチャン」というあだ名をつけられています。

あだ名の由来は、授業のベルが鳴ると文字通りドアを「ガッチャン！」と閉めたからだったかもしれませんね。

農業への深い思い…

日記には天候と、野菜の栽培・収穫の記録が事細かに書いてあります。

カボチャ・エンドー豆・ソラ豆・白菜・ホウレン草・カラシ菜・タカ菜・ソバ・玉ねぎ・カブなど、農家顔負けです。

手間のかかる農作業が、芸大の仕事が忙しい時期に盛んに行われていることに驚きます。



埼玉県ゆかりの童謡

♪みかんの花咲く丘

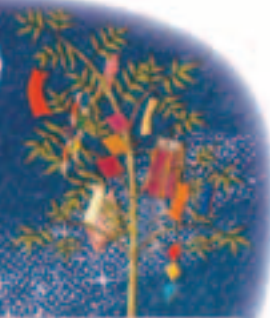
みかんの花が咲いている
思い出の道 丘の道
はるかに見える 青い海
お船がとぶく かすんでる

加藤香苗(大正3年~平成12年)が
深谷市に疎開中、故郷の静けさ思い出して
作ったのが「みかんの花咲く丘」です。



♪たなばたさま

ささのはさらさら
のきばにゆれる
お星さまさらさら
さんざんすなご



加須市(旧大利根町)生まれの
下郷成一(明治31年~昭和37年)
は、「たなばたさま」「かくれんぼ」
など数多くの童謡を作曲しました。

♪家山子

山田の中の一本人のかかし
天気の良いのにみの登つて...



さいたま市に生まれた武笠三
(明治4年~昭和4年)は、見沼
田んぼをイメージして「家山子」
を作詞したと言われています。

♪とおりゃんせ

とおりゃんせ とおりゃんせ
ここはどこ細道じゃ
天神さまの細道じゃ
ちょっととおしてくだしゃんせ...



歌に出てくる天神さまは、川越市の
三河野神社だと言われています。

♪靴が鳴る

お手つないで 野道を行けば
みんな可愛い 小鳥になって
喉をうたえば 靴が鳴る
晴れたみ空に 靴が鳴る



和光市に住んでいた清水かつら
(明治31年~昭和26年)は、武蔵野
の雑木林をイメージして「靴が鳴る」
「叱られて」を作詞したと言われて
います。

にほんきんだいおんがく きそ つく
日本近代音楽の基礎を作った

しも おさ かん いち
下總 皖一



自筆譜「かくれんぼ」

1898~1962

しも おさ かん いち ねん ぶ 下 總 皖 一 年 譜

- 1898年(明治31年) 0歳 3月31日、埼玉県原道村(現・加須市)に父吉之丞、母ふさの二男として生まれる。覚三と名付けられる。
- 1912年(明治45年) 14歳 栗橋尋常高等小学校を卒業。
- 1917年(大正 6年) 19歳 埼玉師範学校本科一部を卒業。(現・埼玉大学)
- 1920年(大正 9年) 22歳 東京音楽学校を1番で卒業。(現・東京芸術大学)
長岡女子師範学校の先生になる。
- 1921年(大正10年) 23歳 飯尾千代子と結婚。
県立秋田高等女学校、秋田県師範学校附属小学校の先生になる。
- 1924年(大正13年) 26歳 栃木師範学校の先生になる。千代子夫人が病気がちのため伸枝と名前を変えたのと時期を同じくして、覚三改め「皖一」とする。
本格的に作曲に取り組む。
- 1927年(昭和 2年) 29歳 東京牛込喜久井町に引っ越しをする。
- 1932年(昭和 7年) 34歳 文部省(現・文部科学省)研究員として、作曲法の研究のためにドイツへ行く。ベルリンの国立ホッホシューレに入学。パウル・ヒンデミット教授に教えを受ける。
♪「スキー」「ほたる」「電車ごっこ」を作曲。
- 1934年(昭和 9年) 36歳 ドイツでの2年の留学生生活を終えて帰国。
東京音楽学校の先生になる。
- 1935年(昭和10年) 37歳 ♪「三味線協奏曲」を作曲 ★「和声学」を書く。
- 1938年(昭和13年) 40歳 ♪「箏独奏のためのソナタ」を作曲 ★「作曲法」を書く。
- 1940年(昭和15年) 42歳 文部省教科書編集委員となる。
♪「花火」「たなばたさま」「野菊」を作曲。
- 1941年(昭和16年) 43歳 品川区上大崎に引っ越しをする。
- 1944年(昭和19年) 46歳 ★「日本音階の話」を書く。
- 1950年(昭和25年) 52歳 ♪「下總皖一混声合唱曲集10巻」の出版が始まる。
- 1955年(昭和30年) 57歳 文部省教科調査委員となる。
- 1956年(昭和31年) 58歳 東京芸術大学音楽学部長となる。
- 1959年(昭和34年) 61歳 東京芸術大学音楽学部長を辞める。亡くなるまで同大学の先生として授業をする。
- 1962年(昭和37年) 64歳 7月8日、永眠。

こ ころ 子どもの頃

こ ころ かんいち ほんみょう かくぞう
子どもの頃の皖一は、(本名を覚三といたたのです
が)やせっぽちで、弟と双子かと思われるくらいで
した。

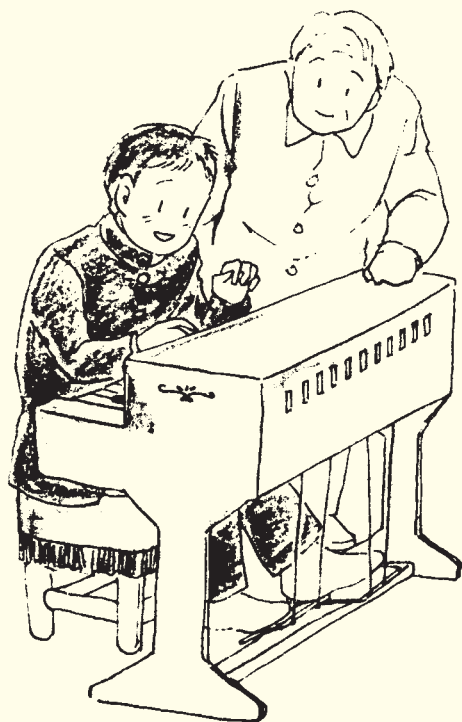
さいたまけんはらみちむら げん かぞし とねがわ ちか
しかし、埼玉県原道村(現・加須市)の利根川近くの
いえ た おがわ げんき あそ
家のまわりの田んぼや小川のあたりで、元気よく遊び
まわっていました。

うつく へんか しぜん なか あそ おも
このように美しく変化する自然の中で遊んだ思い
で おんがく こころ みなもと ちが
出が、「音楽の心の源」となったに違いありません。

がっこう かよ こころ 学校に通っていた頃

こうとうしょうがっこう い とき はじ
高等小学校へ行っていた時、初
めてオルガンを弾いてもよいと言
われ、指でピポピポと音を出してみ
ますと、その音の美しさに、すっか
り夢中になってしまいました。

かかんいち おんがく みち すす
これが、皖一が音楽の道へ進む
しゅっぱつてん
出発点であったのかもしれない。



おとな 大人になってから

かんいち さいたましほんがっこう せんせい がっこう
皖一は、埼玉師範学校(先生になるための学校)か
らとうきょうおんがくがっこう とうきょうげいじゅつだいがく すす そつぎょう
ら東京音楽学校(今の東京芸術大学)へ進み、卒業の
とき せいせき ばん どりょく ひと
時には成績が1番でした。努力をおしまない人でした。

さつきよく ほんかくてき ちから い
それから、作曲も本格的に力を入れ、34さいになっ
たとき もんぶしょう いま もんぶかがくしょう りゅうがく
た時、文部省(今の文部科学省)からドイツへの留学を
めい ゆうめい せんせい しどう う
命ぜられ、有名な先生から指導を受けました。

にほん かえ うつく こころ し きょく
日本へ帰ってからも美しく心に染みいるたくさんの曲
をつく おんがく しく と あ わせいがく
を作るとともに、音楽の仕組みを解き明かす「和声学」と
ほん か せんせい たいへん
いう本を書きました。ドイツの先生からも大変ほめられ
たその本は ほん いま にほん つか
今でも日本で使われています。

とうきょうげいじゅつだいがく せんせい なが すぐ おんがくか
東京芸術大学の先生も長くつとめ、優れた音楽家を
そだ
たくさん育てました。



おんがく
音楽
りろんか
理論家

さつきよくか
作曲家

おんがく
音楽
きょういくか
教育家



みかん好きで有名

旅行の時は「作曲ノート」と「みかん」を決して忘れなかったそうです。時には、みかんを20個も持っていき、みんなにすすめ自分でもとてもおいしそうに食べました。芸大の学生がみかん狩りの旅行を企画した時は、喜んで参加したそうです。



ガッチャン!

とても几帳面な生活ぶりでした。時間には厳しく、遅刻は許さなかったそうです。芸大の教授時代に学生たちから「ガッチャン」というあだ名をつけられています。あだ名の由来は、授業のベルが鳴ると文字通りドアを「ガッチャン!」と閉めたからだったかもしれませんね。



農業への深い思い

日記には天候と、野菜の栽培・収穫の記録が事細かに書いてあります。カボチャ・エンドー豆・ソラ豆・白菜・ホウレン草・カラシ菜・タカ菜・ソバ・玉ねぎ・カブなど、農家顔負けです。手間のかかる農作業が、芸大の仕事が忙しい時期に盛んに行われていたことに驚きます。



埼玉県ゆかりの童謡

♪みかんの花咲く丘

みかんの花が咲いている
思い出の道 丘の道
はるかに見える 青い海
お船がとぶく かすんでる

加藤香苗(大正3年～平成12年)が
深谷市に疎開中、故郷の情景を思い出して
作ったのが「みかんの花咲く丘」です。

♪とおりゃんせ

とおりゃんせ とおりゃんせ
ここはどこか細道じゃ
天神さまの細道じゃ
ちょっととおしてくだしゃんせ...

歌に出てくる天神さまは、川越市の
三光野神社だと書かれています。



●**加藤香苗**
【みかんの花咲く丘】
(詞：加藤香苗)

●**加藤香苗**
【かにの双眼鏡】
(詞：矢野たけせ)

●**加藤香苗**
【たなばたさま】
(曲：下橋玄一)

●**さいたま市**
【東山子】(詞：武笠三)
【知らない子】(詞：宮澤幸二)
【小さい母】(詞：小松原まさる、曲：加藤井佳世子)

●**加藤香苗**
【なんじゃもんじゃのこもりうた】
(詞：三枝未すみ)

●**加藤香苗**
【キリン】
(詞：清水たみ子)

●**加藤香苗**
【風の言葉 雲の船】
(さかどの童謡)

●**加藤香苗**
【こゆび】(詞：こむせ・たまみ)

●**加藤香苗**
【靴が鳴る】(詞：清水かつら)

●**加藤香苗**
【おつかいありさん】(詞：関根栄一)
【とおりゃんせ】(わらべうた)

♪靴が鳴る

お手つないで 野道を行けば
みんな可愛い 小島になって
喉をうたえば 靴が鳴る
晴れたみ空に 靴が鳴る



和光市に住んでいた清水かつら
(明治31年～昭和26年)は、武蔵野
の雑木林をイメージして「靴が鳴る」
「靴が鳴る」を作詞したと書かれて
います。

♪たなばたさま

ささのほさささ
のさばにゆれる
お星さまさささ
さんざんゆんで

加清市(旧大利根町)生まれの
下橋玄一(明治31年～昭和37年)
は、「たなばたさま」「かくれんぼ」
など数多くの童謡を作詞しました。

♪東山子

山田の中の一木足のかかし
天気の良いのにみの登つて...



さいたま市に生まれた武笠三
(明治4年～昭和4年)は、丹波
田んぼをイメージして「東山子」
を作詞したと書かれています。